

Title	国語科で国語辞典を利用する前に考えるべきこと
Author(s)	平井, 吾門
Citation	弘前大学教育学部紀要, 118, p.9-17, 2017
Issue Date	2017-10-13
URL	http://hdl.handle.net/10129/6268
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

国語科で国語辞典を利用する前に考えるべきこと

Things to Think Before Using Japanese Language Dictionary in Japanese Language Education

平 井 吾 門*

Amon HIRAI*

要旨

本稿は、「国語辞典」という概念が不明瞭な状況で、国語辞典を活用した教育方法が模索されている現状に対して、五十音の扱いを例として問題提起を行うものである。そして、小学校の段階で示された知識が更新されることなく大学に至る現状があることに鑑みて、国語科における「知識のアップデート」の必要性を説く。

キーワード：国語辞書、五十音、国語科教育

1 はじめに

国語辞典が国語科教育と高い親和性を持つことはもはや自明と言って良い。教科書で国語辞典の引き方を学んだり、新たな教材を学ぶ際の意味調べに活用したりすることに留まらず、教育現場で一世を風靡した深谷圭介氏の「辞書引き学習法」のように、国語辞典を活用する学習の実践例が様々な媒体で紹介されている^{(*)1}。小学校および中学校の新学習指導要領においても、国語科における国語辞典の利用を求める旨が記されており、国語辞典と教育現場との密接な繋がりは今しばらく続くものと考えられる。

昨今、テレビや一般向け書籍等のメディアで国語辞典が取り上げられることも多い。小説『舟を編む』（三浦しをん、光文社、2011）は映画化やアニメ化もされ、国語辞典編集者という存在を世間一般に啓蒙した。また、国語辞典編集者自身が語る辞書作りの裏側についての書籍は数多く刊行されており^{(*)2}、数ある国語辞典の特徴や各々が持つ語釈の妙味等がたびたび話題になっている。それらで示される情報は、教師や子供たちを媒介にして学校現場にも少なからぬ影響があると考えられる一方で、娯楽性や辞典の販促性を追求した記述も散見され、辞書研究の蓄積を踏まえていない不正確な言及を含むことがあるという問題もある。

「ヤフー知恵袋」といったインターネット上のやりとりにおいても、「小学生の子供に買い与える国語辞

典はどのようなものが良いか」といった主旨の問いに対して、顔の見えない辞書愛好家から「お子様が直感的に気に入ったものを買えば大丈夫」といった（ある意味で無責任な）情報提供が頻繁に行われている。国語科の教員にとって、保護者等々から国語辞典選択の基準を問われることは少なくないであろうが、「ヤフー知恵袋」のような匿名性の高い状況下での返答とは異なり、個々の子供と接している立場から責任のある回答が求められる。そのため、啓蒙書や娯楽のための新書類だけでは得られない、国語辞典についてのより高度な知識を有しておくべきであることは言を俟たない。

雑誌『国語科教育』の創刊号では、見坊豪紀氏が次のように国語科教育における辞書指導に憂慮を示している。

国語教育では大いに辞書をつかわせるべきだと主張がやかましくなったのは終戦以来のことである。子供のためのよい辞書もいろいろ出始めた。しかし、日本の辞書はどういう基本的性格をもち、それに対してはどう考えるべきであるか、ということについては余り論じられないようである。けれども、教師が辞書に対してははっきりした意見と態度をもつことなしに、どうして辞書の正しい使い方、有効な使い方が指導できようか。まして、辞書に対する正しい評価、正しい批判と注文がどうしてなされようか。この論文は一見国語教育とは縁遠いようではあるが、辞書に対する教師の態

* 弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

度をきめるのにいくらか役だつてであろう。^(*)3)

ここから半世紀以上経った今、国語辞典を啓蒙した書籍が数多出回る(=それだけ売れる)現状に鑑みれば、状況はあまり変化していないように感じられる。

これらをふまえて、大学で国語辞書研究を行う立場から、改めて国語科教育における国語辞典の扱いについて、その課題と意義を論じてみたい。

2 「知のアップデート」の必要性

まず国語辞典について論じる前段階として、国語科における「知のアップデート」の必要性を示しておく。国語科で扱う力の中で、語彙力や読解力や論理力等は小学校から徐々に積み重ねていくものであり、そのこと自体も小中高の教員にとって(連携がうまくいっているか否かは別問題として)共通認識となっていよう。しかるに、こと言語的な内容については、小学校から高校に至る過程でその情報が高次に昇華(=アップデート)されることのない事項が相当数存在している。このことは、大学において国語学(日本語学)の基礎を教授する際、あるいは現職の小中高の教員と接する中で強く感じることである。

例えば、算数・数学で学ばれる図形の「円」は、小学校で「円周率3.14」という概数を用いて基礎的性質を学び、中学では「 π 」を利用してより高度な理解を目指す。高校から大学に至るまでにも、関数や複素数を導入してより高度な理解を進めていき、「円」に関する知識が自覚的にアップデートされていく。社会科で学ぶ「鎌倉幕府」についても同様である。小学校から高校・大学に至るまで、鎌倉幕府について繰り返し扱われ、より高度な内容を学習していくことになる。小中学校で鎌倉幕府を学ぶ際、4代目以降の將軍についての詳細や、代表的な執権の執政以外が扱われることは殆どないため、「教科書の先により高レベルな探求課題がある」ということを子供ながらに直感することも可能であり、成長するにつれて鎌倉幕府についての知識を自覚的にアップデートしていく(少なくともそのようなカリキュラムになっている)のである。もちろん教師の側も、子供たちの学ぶレベルを超えて自覚的に知識をアップデートしていくことが求められる。

一方国語科に関しては、大人になった時に知識が小学校段階で留まっても、恥じらいを感じないばかりか、その先により高度な理解を要する内容が存していることにすら気付けない事項が多い。そもそもアップデートが必要であるという意識そのものが欠如して

いるとも言える。

例えば、大学の講義において学生に「濁音とは何か」「活用とは何か」といった基礎事項を尋ねてみると、「ガザダバのように濁った音のこと」「動詞や形容詞や助動詞が形を変えること」といった答えが返ってくる。これらはあくまで部分的な例示に基づく初歩的な説明に過ぎず、濁音や活用の本質とは言えない。そして、「濁った音とはどのようなものか?」「不変助動詞と助詞との違いは何か?」と重ねて尋ねると、「汚いガラガラな音で澄んでいない音」「助詞が活用したらおかしいから」のように、感覚に頼った非論理的な説明に終始する学生が数多く現れる。言語学の基礎を学んだ学生は、「濁音=有声音のこと」といったややレベルの高いの誤答を示すこともあるが、それもまた開音節構造に立脚した国語音韻の基本が身に付いていないことの証左となってしまう。もちろん、本質的に濁音について理解するためには、日本語の歴史の変遷や中国音韻学の用語受容の流れなどを学ぶ必要があるが、「濁音=ガザダバのような音のこと」というのは、小学生の理解そのままである。学生の毎年の反応を見てみると、「濁音」のような初歩的(と学生が感じていた)事項に対する自己の認識が小学校レベルに留まっていることに気付き愕然とする受講生が相当数に上っている。

現行の学校教育において、高次のレベルで濁音について学ぶ機会にはほぼない。濁音について、小学校で教授する際には、基本的に「ガザダバのように濁った音のこと」と例示するに留まるが、これは小学校の発達段階に合わせれば当然の指導方法である。英語を本格的に学び、国語の言語的な事象の観察も深まる中学校の発達段階に合わせて、その小学校の知識を更新するチャンスは少なくないであろうが、実際には「濁音が何物であるかは既に知っている」ということが大前提となって、国語科の授業が進んでいくことになる。さらに、高校で古典を学ぶ際にも、「昔の人は濁点を付けないことがありました」といった説明はするものの、改めて濁音についての考察を深めるような機会はない。そのため、大学で国語学の基礎を通じて濁音の何たるかを学ぶとき、その事項の本質が小学校で学ぶ知識とかけ離れていて、なおかつ小学校の知識が大学生に至るまで常識のように脳を支配していたことに衝撃を受けるのである。

同様の事は、「読点の打ち方」「文体の在り方」「部首と偏旁冠脚の関係」等々において指摘することができる。小学校の国語科で学んだ語学的事項について

は、小中高の連携を深めて、子供も教師も意識的に「知のアップデート」を進める必要があるのであるし、そもそも小学校国語科で扱う内容にアップデートすべき内容が数多くあること自体に自覚的になる必要がある。

問題は、学習指導要領で扱うべき内容ではない云々の前に、日常的に国語科で利用される用語の中にこそ、アップデートの対象があるということなのである。

3 教科書における国語辞典の扱い

「知のアップデート」という点から見れば、国語辞典についても同じことが言える。国語辞典については、小学校で引き方や特徴を具体的に学ぶが、そもそも国語辞典とは何物であるのか、そこで示された解釈はどのように活用されるべきものであるか、といった国語辞典の本質を突く指導は小学生の発達段階上難しく、指導要領にも求められないため行われていない。中学校では、「国語辞典については小学校で習っているよね」というスタンスで授業が展開され、国語辞典の存在が当然のものとして扱われ、意味調べ等で具体的に活用する「当たり前の道具」となっている。そのため、小学校の時に為し得なかった国語辞典理解の深化は、中学校でも果たされないのである（もちろん、指導要領上、そのようなことは求められていない）。高校に至って、古語辞典の引き方等々を新たに身に着ける中で、対照的に国語辞典の本質に迫るタイミングはあるものの、やはり国語辞典については大前提として流されるのが一般的のようである。

無論、指導要領上求められていないことをやる必要性も余裕も存しない場合が多いであろうが、そもそも日常的に利用される国語辞典というものが、小中高と発達段階に合わせて異なる形で編纂・出版されており、小中高と連続で「国語辞典」という用語を利用していても、その内実が異なることを知らねばなるまい。その上で、少なくとも教師の側が国語辞典の高レベルな理解を進めておけば、発達段階に合わせて適切な声掛けを行うことが出来よう。

想像を逞しくすれば、教員の側にも小学校で扱う国語辞典に「その先」の高次元の世界が展開していることを理解していないという事情があり得る。大学における国語科の教員免許取得希望者を通覧していても、国語辞典の高レベルな（といっても高校生の発達段階に合わせたレベルの）理解をしている者はほぼいないのが現状である。教師が「その先」を知らずに、子供た

ちに「その先」を感じさせる授業は期待できない。

ここで改めて、国語辞典が小学校でどのような扱いを受けているかを確認しておく。まず、現行の学習指導要領では、〔第3学年及び第4学年〕の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕において、

- (1) 「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

- (カ) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること。

として国語辞典への言及がある。それを受けて、現行の教科書では各社とも3年生の教科書で国語辞典の引き方についての解説を設けている。以下、具体的に見てみよう。

『小学生の国語 三年』（三省堂、平成28年度版）では、「国語じてんをつかおう」という単元を設定し、「国語じてんをつかおうと、次のようなことがわかります」として「1 言葉の意味がわかる」「2 漢字での書き表し方がわかる」「3 言葉のつかい方がわかる」の3点を具体例とともに示している。「次のようなこと」というのは、国語辞典の本質をぼかした婉曲的表現であるが、基本的に各社ともこのような記述スタイルを取っている。『新編 新しい国語 三上』（東京書籍）と『国語 三上 わかば』（光村図書）では、国語辞典を使うことで言葉の意味や漢字表記や言葉のつかい方「など」が分かるとしており、国語辞典の意義を「など」で括っている。『ひろがる言葉 小学国語 3上』（教育出版）では、「言葉の意味や漢字の書き方を調べるのに、国語辞典が役に立つよ」として、「AやB」のような形で例示する。

『みんなと学ぶ小学校国語 三年上』（学校図書）では、言葉の意味・漢字表記・使い方に加えて、「国語じてんには、土地の名前や人の名前、動物やしょく物の名前などもついています。図やしゃしんがのっていることもあります」と記されている。百科項目は載せないという原則を立てる国語辞典の存在をふまえると^(*)、この記述は「そもそも国語辞典とはどのようなものか」という国語辞典の本質を理解する上で、後々補足が必要となる箇所である。

もちろん、これら教科書の説明及びそれに従った指導によって、国語辞典のあらまはしは身に付くため、指導要領を満足するには十分な情報量であると言える。しかし、上の百科項目の例から敷衍できる如く、

国語辞典においてはどの事項が必須要件であり、何が欠けるとその書物は国語辞典ではなくなるのか？という問いに対して、小学校段階のように意義を例示するだけの指導内容では、正確な答えに窮することもまた分かる。また、国語辞典に載っていない項目や意味があることについて、「なぜそのような事態が生じるのか」「なぜ辞典ごとに載る言葉や説明が異なるのか」という疑問が当然生じるが、国語辞典について小学校レベルの理解しかなければ答えるのは難しい。

次に、中学校における国語辞典教育の現状について確認しておきたい。中学国語の教科書（5社、平成28年度版）では、3社において国語辞典の解説に頁を割いており、次のような解説が施されていた。なお、学習指導要領および同解説編には、状況に応じて辞書を活用する旨以上のことは記されていない。

三省堂の『現代の国語1』では、各学年ごとに置かれた「辞書を活用する」という項目で、「国語辞典の使い方」が載せられている。ここでは、「国語辞典は、意味のわからないことばを調べるときに使うのが基本的な使い方ですが、文章を読む中で、前後のつながりから、最も適した意味を選ぶために活用することも出来ます。」として具体的な意味選択の例を示す。その上で、「こんなことも調べられる」として、「品詞を知りたいとき」「意味が似ていることばや反対の意味のことばを知りたいとき」「漢字を知りたいとき」「二つ以上のことばを調べて、意味を比べることによって、意味や使われ方の違いを知ることができます。」と書かれている。

光村図書の『国語1』では、「調べる【辞典・事典・インターネット・図書館】」という項目で、国語辞典について触れられており、「言葉の意味・使い方・漢字での書き表し方などを調べたいときには、国語辞典を使う。」という説明の後に国語辞典の模式図を示し、辞典要素について「見出し語 五十音順に並んでいる。柱、つめなどを参考に探す。」「文法事項」「言葉の意味 複数ある場合は、調べている言葉がどの意味に当てはまるかを考える。」「用例など 言葉の使い方や、類義語（似た意味の言葉）・対義語（反対・対の関係の言葉）などを参考にできる。」などと記している。そして「やってみよう」という小見出しのもと、「異なる出版社の国語辞典を使い、『右』と『左』について調べて、説明のしかたを比べてみよう。」という発展課題が示される。

教育出版の『伝え合う言葉 中学国語1』では、「国語辞典と漢和辞典」という項目で、「国語辞典の使

い方」が示される。「言葉の『意味』を知りたいとき、言葉の『使い方・使われ方』を知りたい時には『国語辞典』を使う。」として、「読み方が同じ言葉（または漢字）の、意味の違い・使い方の違いを調べるとき」や「言葉の品詞を確認するとき」に使うことを勧める。また、「調べ方のポイント」として、「『見出し語』は、五十音順に配置されている。」「意味が複数ある言葉は、(1)、(2) ……のように分類して示されている。」「言葉の実際の「使い方・使われ方」が用例として示されている。」という説明が続く。

3社ともに、基本的には小学校を踏襲した国語辞典の利用法を記すだけに留まっており、中学2年生以上の教科書で更に知識が更新されることもない。特に、国語辞典とは何物かという本質に迫る部分については、変わらずに具体例が示されるのみである。辞典ごとの語釈の違いを比較するという課題を示す教科書もあるが、小学校の授業で意味調べの結果を子供たちに発表させる際、数種類の辞書の記述を子供たちが発表することで、結果的に意味の比較が為されることは珍しくない。そのため、中学校において改めて国語辞典毎の語釈の差を比べたとき、そこからどのような発展的説明を引き出せるかは、各教員に任されているのが現状であり、その質の不安定さが懸念される。

4 国語辞典の定義とその問題点

そもそも、国語辞典というものはその定義が明確に定まっているとは言い難い。「国語辞典」の説明をいくつかの辞書類から抄出する。

- (A) 日本語を集めて、「あ・い・う・え・お…」の順に並べ、その意味・使い方などを説明した本。この本もその一冊である。（三省堂『例解小学国語辞典 第六版』）
- (B) 日本語の単語を集めて、一定の順にならべ、書き表わしかたや意味・用法などを日本語で説明した書物。国語辞書。（三省堂『例解新国語辞典 第九版』）
- (C) 日本語の単語・連語などを集めて一定の順序にならべ、その意味・用法・用例などを示した辞典。（三省堂『現代新国語辞典 第五版』）
- (D) 日本語の単語や句などを一定の順序に並べ、表記・意味・使い方などを日本語で説明した辞典。（『三省堂国語辞典 第七版』）
- (E) 日本語の語彙を一定の順序に配列し、それら

の語義・用法などを日本語で解説した書物。古くは平安時代に「倭名類聚鈔」があり、以後、「節用集」「和訓栞」「俚言集覽」などが作られ、明治になると「言海」などの近代的辞書が生まれるようになる。(三省堂『大辞林 第三版』)

- (F) 日本語に見出せる語を集めて一定の順序に並び、その意味、用法、語源などを日本語で説明した書。用例を添えたり、関連する語を示したりするものもある。古語・現代語にわたり、専門語まで広く収めた大型のもの、現代語または古語どちらかを中心とした小型のものなどがあるが、時代別・作品別のものや特殊な語だけ集めたものを広く含めてもいう。国語辞書。(以下略)(小学館『日本国語大辞典 第二版』)
- (G) (前略)【構造】今日目にする国語辞書は、漢字・漢語と和語(固有日本語)との関連で日本語の語彙の中核が形成されており、これに対応するようにさまざまな試みが積み重ねられて、形式と内容を一定の型に整えていく過程を経て、ようやく現出したといえる。知らない、意味のよくわからないことばについて知識や情報を得るためにわれわれは国語辞書を引いて利用する。したがって、国語辞書とは何かということを示すと、以下の内容となろう。国語辞書とは、一定の基準で集められた語彙項目に解説を加えて検索しやすいように一定順序に配列した辞書のうち、次の要件を具備しているものと考えられる。①普通語を見出し語とする(地名・人名などの固有名詞、専門語等の百科項目は原則として対象としない)。②見出しの解説には次の情報を記す必要がある。表記(仮名遣い・送り仮名・漢字・原字綴)・発音・アクセント・文法・品詞・語構成・語種・語源・語誌(史)・意味・語釈・用例・出典・用法・位相・関連語・成句・連語・挿し絵等。③合理的な基準の下で見出し語の配列(通常は五十音順)をして、検索しやすいようにする。④辞書編纂法に従って編集することと、利用者を引き方の手順法等の利用の仕方をはっきりと示す(編集方針・理念の明記と使用の手引きの提示)。つまり、国語辞書とは、普通語を対象とした、辞書編纂法によって組織的・体系的

に編集がなされる自国語の言語辞書ということになる。(以下略)(犬飼守薫氏担当)

(朝倉書店『日本語大事典』)

(A)は、小学生向け、(B)は中学生向け、(C)は高校生にそれぞれ編集された小型の国語辞典であり、(D)は一般向けの小型辞典、(E)は一般向けの中型辞典、(F)は大型辞典である。(G)は、日本語学の関連諸事項を詳説する専門事典である。

収録語彙の説明を抜き出せば、「日本語」(A)という抽象的な語が「単語」(B)となり、「単語や連語など」(C)・「単語や句など」(D)を経て、「語彙」(E)へと至り、発達段階に合わせてより高度な説明が展開されていく様子を観察できる。これは、辞書の見出し項目が単語だけではなく句なども含むことをふまえて、より正確性を追究した結果であることは想像に難くない。

国語辞典に求められる情報としては、「意味・使い方など」(A)、「書き表わしかたや意味・用法など」(B)、「意味・用法・用例など」(C)、「表記・意味・使い方など」(D)のように、それぞれ具体例が「など」で示されている。これは、専門性の高い(F)や(G)でも、例示される量は増えるものの同様である。つまり、「国語辞典にどのような情報があれば便利か」ということは、発達段階に合わせて詳細な説明が為されるものの、「どの情報を含むものが国語辞典であるのか」という要件を明示したものは無いことが分かる。

物事を説明するとき、「～など」と例示するだけでは本質的な説明とはなり得ない。「など」という言葉に何が込められているのかを読者に委ねることになるからである。もちろん、抽象度の高い概念を子供に教授する際、具体例が絶大な力を発揮するのは疑いないことであるが、発達段階に合わせてその理解度が増すように指導して、知識をアップデートさせていく必要があるのもまた事実である。

翻って国語辞典による解説を見てみよう。規範性の高い国語辞典や専門の事典による「国語辞典」についての解説でも、具体例及び「など」による説明が核にあることが分かる。つまるところ、国語辞典に確固たる定義などはなく、江戸期に商業主義の中で国語辞書の祖型が現れ、明治期に近代的国語辞書の相克が進んで以降、各国語辞典は「より権威となるため」「より売れるため」に独自性を追究し、多様化してきた。現代国語辞典の語釈に見られる「など」は、近代国語辞典が宿命のように持つ多様性について示しており、数ある国語辞典の存立する理由もそこに表れているので

ある。すなわち、国語辞典は自らの「国語辞典」の定義に幅を持たせることで、自ら存在意義を確立してきたのである。そして、小学生向け・中学生向けといった形で、まさにその幅広さを体現することになる。

「小説」や「詩」「論説文」なども、その定義を突き詰めることは難しく、学校教育では緩やかな共通項を学ぶことになる点で共通するが、国語辞典は、学ぶ対象と言うよりも学ぶための道具としての意識が強いため、そこに規範性が求められる。国語辞典というものに固定された規定などはなく、小中学校では、各社に大よそ共通する事項を具体的に習っているに過ぎない。国語辞典の要件であるかのように記される用例についても、辞書の規模によっては要件とならないことも珍しくない。

「国語辞典を引けば、必要な情報や正しい意味が載っている」という幻想を小学生が抱くのは仕方ないことだとしても、その「国語辞典」という概念が不安定なものだということについては、中学生以上の子供たちが国語辞典の特色を徐々に明確にしていく中で実感していくのが望ましい。国語科の授業で行われる国語辞典を使った意味調べにおいて、異なる辞書の記述を発表させて比較させることは小学校から行われている。中学、そして高校へと進むにつれて、辞典ごとに語彙体系や語釈記述の方針が異なることを踏まえて、その多様性を相対化して客観視していくことが可能であり、必要である。しかし、学習指導要領に沿った現状では、カリキュラムとしてそこまでの認識を得られないことがないため、一般向けの書籍でことあるごとに示される「国語辞典の本質は凡例にある」という事実がキャッチーに働くのである。学校教育で国語辞典を扱う以上、編纂方針に照らし合わせた国語辞書自身の相対化は、「国語辞典を何とか教育現場に持ち込もう」と工夫する教員が新書等で仕入れた知識を話題提供するようなトリビアではなく、発達段階に合わせた発展的に行うべきマストである。

5 国語辞典と五十音順

国語辞典と国語科教育に纏わる問題点は数多のものがあるが、ここでは小学校から触れられている「五十音順」に着目してまとめてみたい。

五十音順が何物であるかを説明できない大学生はほばいないが、その説明が小学生の持つ知識からどれほどアップデートされたものであるかを尋ねると、大半の学生が答えに窮するのが現状である。例えば、小学校1年生の国語の教科書では、「ごじゅうおん」とし

て、現代仮名遣いによる「あいうえお～わいうえを」の五十音図を載せ、最後に「わ」の左隣に「ん」を付ける表が各社に共通して見られる。そして、3年生の教科書で国語辞典について扱う際、「見出し語が五十音順に並んでいる」旨を各社ともに扱っている。これにより、素直に考えれば「あいうえお……わいうえをん」という順序が五十音順であるという理解になる。しかし、「あ～ん」までについて、ヤ行とワ行の「い」「う」「え」の重複を計測すると50になり、それに「ん」を加えると51となること、そして「い」「う」「え」の重複や「お」「を」の音が等しいことから、音が50種類あるわけでもないことを考えると、五十音という概念が単純に理解できる類のものではないこともまた自明である。

国語学において、五十音や五十音図がどのようなものであるのかということについては、数多くの先行研究がある。「五十音図の並び順が何に立脚するのであるのか」「なぜ『ん』は『わ』の横にあるのか」「ヤ行とワ行に『い』『う』『え』が重複して見られるのはなぜか」といった疑問は、学術的説明はもちろん可能であるが、小学生には理解し難い難題でもある。このような疑問は、指導要領に縛られる以前の日常的な知識のアップデートによって徐々に解決していく必要があるが、どこまで実践できているかは不透明である。

さて、国語辞典で「五十音」「五十音順」を引いてみる。まず、小学生向けの辞典では次のような説明が行われている（用例や記号などを一部省いた）。

ごじゅうおん〔国語で〕かなで「あいうえお」から「わ（ゐうゑ）を」までを、五段十行に書き表した五十の音。そのように書き表した表を「五十音図」という。や行の「い」「え」とわ行の「う」は「あ行」と同じ音、わ行の「ゐ」「ゑ」は今使われず、「を」は「お」と同じ音のため、実際は「ん」を含めて四十五音である。（※巻末のふろくのページ数が示される。ふろくには、『ん』は五十音図に含めない。」と記されている。）

ごじゅうおんじゅん 五十音の順番。あ・い・う・え・お…の順。

（三省堂『例解小学国語辞典 第六版』）

ごじゅうおん かなで書きあらわした、あ・い・う・え・お、か・き・く・け・こ……の五〇の音。

ごじゅうおんじゅん あ・い・う・え・お、か・

き・く・け・こ……のじゅん。

(『学研ベスト教科事典 国語辞典』
 ごじゅうおん かなで書く、「あかさたなはまや
 らわ」の各行の五十の音。現代かなづかいで
 は「わ」行の「ゐ」「ゑ」は、「あ」行の「い」
 「え」をあて、「や」行の「い」「え」と「わ」
 行の「う」は「あ」行と同じなので、実際には
 「ん」を入れて四十五音である。
 ごじゅうおんじゅん 「あいうえお」の、五十音
 の順番にならべること。あいうえお順。
 (『小学館例解学習国語辞典 第十版』)

問題になるのは、撥音「ん」の扱いである。学研の辞典では、「ん」を五十音に含めない旨が示されており、それにならった五十音順でも当然「ん」については含めないものと読むことができる。一方、小学館の辞典における五十音の説明では、五十音図を用いた説明から国語の音素の説明へと転換が図られて錯綜が見られるが、結論としては「ん」を五十音に入れるものと読める。そして、それに続く五十音順の説明では、明示はしないものの「あいうえお……ん」という流れを読み取ることができる。三省堂では、五十音の説明では「ん」に触れつつ、巻末の「ふろく」では『「ん」は五十音図に含めない。』とするため、真意を掴み兼ねる。

各辞書の記述が一定していなことを確認したうえで、次に一般向けの国語辞典を見てみよう。

ごじゅうおん かな文字で書き分けることの出来る、日本語の基本的音節を体系的に整理して示したもの。[拍の体系とは異なり、狭義では濁音・拗音・撥音・促音・長音などは含まない]「一順・一図」

(三省堂『新明解国語辞典 第七版』
 ごじゅうおん (1) 五十音図に組織だてられた五〇個の音で、日本語の基本的な音節の体系。仮名(古くは片仮名が多い)で表記する。濁音、拗音、撥音などは度外視されており、また、同音のものも含まれている。(2) 「ごじゅうおんず(五十音図)」の略。

ごじゅうおんじゅん 五十音図の仮名の順序に従って、物事を排列すること。また、その順序。あいうえお順。

(小学館『日本国語大辞典 第二版』
 ごじゅうおん 日本語で、かなで書き表わす「ア、

イ、ウ、エ、オ…」の音のこと。また、これを「あ行」から「わ行」までの十行、「あ段」から「お段」までの五段に分けてならべた表(=五十音図)のこと。参考「五十音」にふくまれるかなの発音の種類は、実際は四十四だが、習慣で「五十音」といつている。また、「五十音」には、「^h」や「^o」をつけて表わす音(=濁音)「ガ・ギ・グ…」や、「ん」「つ」「ゃ」で表される音は入っていない。

ごじゅうおんじゅん 「五十音」の順番。つまり、アイウエオ、カキクケコ、…の順番。

(三省堂『例解新国語辞典 第九版』
 ごじゅうおん 五〇の音からなる日本語の基本的な音節の総称。仮名で表記する。「一順」時代により実際の音節数は異なり、現代では「ん」を除き清音は四四。

(大修館書店『明鏡国語辞典 第二版』
 ゴジュウオン アイウエオなど一〇行五〇字の仮名で表記した国語の音節の総称。特に「あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ らりるれろ わゐゑを」の順をいい、「ん」を最後に付ける。

(『新潮現代国語辞典 第二版』
 ごじゅうおん 五十音図の、五十の音節。「一順(=あいうえお順)」[実際の音節の種類は、「ゐ」「ゑ」も入れて四十七]

ごじゅうおんず 日本語の音節を、かな文字で、五段・十行にならべた図表。同じ母音をもつものを横に、同じ子音をもつものをたてにならべる。

(三省堂『現代新国語辞典 第五版』)

ここでも、一定した答えは示されていないことが分かる。高校生を含む一般向けの辞典では、基本的に各社とも「ん」を五十音に入れられないというスタンスを取り、五十音順の説明でも補足が特につくことはない。

そもそも文字と撥音/m/が対応した「ん」という概念は、五十音が成立して以降に成立したと考えられているため、本来的に五十音が「ん」を含むことはあり得ないが、実生活に即して考えれば「ん」が五十順に含まれるのもまた明らかである。大半の辞典では、「ん」成立の国語史的事実をふまえて、その本質を分かりやすく解きほぐすことに腐心している様子が伝わる。その中で『新潮現代国語辞典』は、「ん」が

付くことを明示しており異彩を放つ。実生活に即して、五十音順の最後に「ん」が含まれるという点が重視された結果である。すなわち、国語辞典に絶対的な正解等はなく、状況に応じた語釈が為されているという当たり前の結論に至るわけであるが、国語史や国語学史の知識を持つことで初めて各辞書を相対化することができる、そのような結論を導き出すことができるのである。

小学校国語科の教科書で学ぶ「国語辞典では五十音順に語が並ぶ」という説明は、当然ワ行に続く「ん」をも含んだ記述であり、国語辞典で広く採用されている学術的に正しい五十音の在り方というよりも、むしろ一部の辞書で見られる如く実生活に即した五十音の運用方法に則っているのである。小学生向けの国語辞典でもそのことは明示されていないが、一般向けの辞典であっても揺れが見られる、極めてセンシティブな問題である。重要なことは、小学校で具体例を通じて何となく学んでいる五十音・五十音順という概念に、そのようにセンシティブな問題が大きく広がっていて、小学生が（或いは教師が）規範的であると思込んでいる国語辞典を繙いても、その扱いは大きく揺れているというその現実である。

6 まとめ

五十音順の本質を理解するためには、五十音を知る必要がある。大学で国語史を学んだ者にとっては常識とも言える事項であるが、一般には「ん」が五十音に含まれていない理由や、拗音や濁音が含まれていない理由、ヤ行やワ行に抜けがある理由はそれほど浸透していないようである（その証左として、それらについて説いた一般向けの書物が新書や文庫の形で断続的に著されていることが挙げられる）。五十音や五十音図とはそもそも何物であり、それがなぜ国語辞典と結びつくようになったのか、ということは国語辞典史を繙く上での重要課題である。小学生や中学生にその深淵を追究させることは困難を極めるが、小学校から学んでいる国語辞典の「その先」があることはしっかり感じさせる必要がある。少なくとも、小学校で国語辞典が分かったかのような気にさせることには、メリットよりデメリットの方が大きい。

最後に、仮名遣いについて考えておきたい。哺乳類の「象」については現代仮名遣いで「ぞう」と表記するが、標準語に於いてはこれを「ゾー」と発音する。すなわち、「ぞう」の「う」は「おとうさん」の「う」と同様に長音を表していることになる。現代仮名遣いでは、「子牛（こうし）」と「孔子（こうし）」が標記

上区別できず、「きゅうり」「しょうり」のようにウ段長音とオ段長音の区別もつかないことはよく知られている。

それをふまえて、五十音順で並んだ国語辞典で「象（ぞう）」を引いてみれば、決して「ぞう」が「ぞお」といった項目の前後に置かれることがないことが分かり、国語辞典で示される五十音順は、音に準拠しているわけではなく、文字に準拠していることが分かるのである。

小学校教科書の記述を観察すると、子供たちに分かりやすいように様々な例を挙げるものの、前述のように説明に多言を要し、多様な問題へと発展するような事例は巧妙に避けられていることが分かる。もちろん小学生の発達段階でそれらを詳述することは難しいものの、子供たちが実際に国語辞典を運用していく中で生じる戸惑いは、得てしてそういうところにある。そして、国語辞典あるいは五十音、仮名遣いといった事項について、より高次の理解を進める鍵もそこにあるのである。

辞書編纂者たちが示した新書類で、国語辞典はまず「はじめに」「この辞書の使い方」「凡例」などを読もう、などと指摘されることは、まさにその通りである。しかし、辞典ごとに差異を生じるような論点を知るためには、まず小学校の国語辞典教育で具体例の例示だけで終わって「誤魔化して」いる個所をしっかりと認識する必要がある。その際、どのようなポイントに注目すべきかということは、大学で初学者が学ぶような国語学の基礎知識を分析視点とすれば良いのである。もちろん、それが見えて来れば、「小学生にどのような辞典を買い与えるべきか」「中学生の国語辞書としては何が適しているか」といった質問に対しても、「どれでもいいので、子供が自分で気に入ったものを与えましょう」などと国語教師以外の誰でも言える発言で誤魔化すことなく、国語に対する子供の理解具合や教科書との兼ね合い等々から、国語科教育の専門家として自信を持って答えることが可能になる。

国語学の基礎知識を教師が意識的にアップデートさせることで、初めて、小学校の発達段階に合わせた教科書の説明の有用性と脆弱さが見えてくるのであり、小中高と連続的に子供たちの国語力を育てていく道筋が通る。国語辞典は、小学校から高校まで学校現場とは切り離せないツールであるからこそ、「国語辞典で学ぶ」「国語辞典を学ぶ」といったことを言う以前に、国語辞典という概念を含めて、発達段階に合わせて国語科でアップデートすべき内容を把握すべきなのであ

る^(*)5)。

本年示された新しい学習指導要領（小学校・中学校）では、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することをめざす」として、言語文化としての国語教育の継承的涵養と言語活動の益々の充実が、従来以上に打ち出されている。言語文化の根底にある専門知に真摯に向き合うことで、小学校から高校、そして大学へと発展的かつ継承的な国語科の学びが進むのであろう。中でも、五十音（図）や国語辞典の扱いは、単なる「マニアックな国語学的知識」ではなく、言語文化の基礎にあるものである。マニアを自任した人々がマニアックな知識を娯楽として大衆に供する一方で、教育の専門家として学問の本質を如何に子供たちと分かち合えるか——国語辞典はそのようなことも我々に語り掛けている。

注

- * 1 『教育科学国語教育』2003年5月号特集「「辞書」の活用で魅力ある授業を創る」（明治図書）や『同』2013年5月号特集「“辞書引き”習慣をつくる授業アイデア」など。

- * 2 倉島節尚『辞書と日本語 国語辞典を解剖する』（2002、光文社）、松井栄一『出逢った日本語・50万語 辞書作り三代の軌跡』（2013、筑摩書房）、飯間浩明『三省堂国語辞典のひみつ』2014、三省堂など。
- * 3 見坊豪紀「国語辞典の盲点」『国語科教育』1、pp78-97、1952、全国大学国語教育学会
- * 4 『新潮 現代国語辞典 第二版』の凡例には、「現代国語の言語辞典としての性格上、古語・百科項目は原則として収めなかった」と記されている。
- * 5 なお、同様の事は「新聞」についても言える。学校教育、国語科教育における新聞の扱いというものもまた、国語学的知見を取り入れることで知識のアップデートの必要性が浮かび上がる。別稿に期したい。

参考文献

- 沖森卓也編『図説日本の辞書』（おうふう、2008）
馬淵和夫『五十音図の話』（大修館書店、1993）

付記

本稿は、JSPS 科研費17K13460の助成を受けた研究成果を一部含んでいる。

(2017. 8. 8 受理)